



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中澤務 『ソクラテスとフィロソフィアー初期プラトン哲学の展開』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）
Author(s)	三浦, 洋
Citation	哲学, 44, 231-239
Issue Date	2008-02-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35061
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_RP231-239.pdf



《書評》

中澤務 『ソクラテスとフィロソフィア』

—— 初期プラトン哲学の展開 ——（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）

三浦 洋

I プロローグ——プラトン初期対話篇の魅力と問題

書評にプロローグをつけるのは奇天烈だが、不慣れな評者ゆえ助走する紙幅を与えて頂きたい。

プラトンがソクラテスの哲学的営為を描いた対話篇の数々は、掛け値なしに面白い。ソクラテスと出会って自作の詩を焼き捨てたというプラトンだが、作家としての技量は衰えを知らなかったのではないだろうか。評者は大学の演習で、哲学を専攻領域としない学生諸氏数名と『ゴルギアス』篇を購読したことがあるが、毎回の反応は決まっていた。中でも、三人目の対話相手カリクレスがソクラテスを皮肉って言う、「いい年をしてまだ哲学にうつつを抜かしていて、一向にそこから足を洗わぬような男を見ると、もうそんな男は、ソクラテス、ぶんなくってやらなければと思うのだ。……社会の片隅にもぐり込み、三、四人の若造を相手にボソボソとつぶやきながら余生を送り、自由に大声で思う存分力強い発言をすることもないとすればね」（485D—E）の台詞に行き当たると、小さな教室は爆笑の渦に包まれる。エスプリに富むプラトンは、対話篇がこんなふうに「快読」されることもきっと予期していた

にちがいない。

けれども、である。ひとたび対話篇の真意をつかみ、その哲学的意義を明確にしようとする、たちまち読者の行く手には困難が立ちはだかる。とりわけ、歴史的ソクラテスを描いたと一般に考えられている初期対話篇（『ゴルギアス』篇も含まれる）は、入門者に難物だ。

なにしろ、ソクラテスの対話相手はみな最後にはアポリア（行き詰まり）に陥るのである。その結果、「Xとは何か」というソクラテスの問いに対する「正解」を対話相手が示さずに終わるばかりでなく、当のソクラテスも「本当のことは知らない」と言うのだから啞然とせざるをえない【アポリアの問題】。しかるに、もしアポリアに至らしめる目的が、対話相手に無知の自覚（「無知の知」）を促すことにあつたのなら、ソクラテスは相手が自己矛盾に逢着するような命題を繰り出してうまく認めさせればいいわけで、彼自身が本当に抱いていた見解を言う必要はない。極端に言えば、対人論法のオンパレードでいい。だから、ソクラテスの台詞の内容が、彼自身の見解だという保証はないことになる。対話篇作家プラトンの見解かもしれないし、対話相手の背後にいる多くの人々のエンドクサ（通念）かもしれない【見解の主の問題】。加えて、ソクラテスが「デルフォイの神託」や「神々」に言及したり、「ダイモニオンの声を聞いた」と神秘的なことを語ったりするのが気になる。もし宗教的・神秘的な「お告げ」がソクラテスの哲学の原点であるなら、世俗の人間が彼個人の思想に共鳴できるだろうか。そもそも「理性」の営みであるはずの哲学に「信心」の要素を持ち込むことは、哲学を本質的に変質させる行為ではないのか【ソクラテスの宗教問題】。

以上、大まかに三つ挙げた問題は、どれも素朴すぎるほど素朴な疑問であらう。しかし、この素朴な問題群が初期対話篇を読み解く上で究極の問題となる事柄でもあるようだ。実は、これらの問題に真正面に取り組み、独自の考察を結晶化させたのが、中澤務氏の博士（文学）学位論文『プラトン初期対話篇におけるソクラテスの倫理思想』に加筆・修正のうえ上梓された本書にはかならないのである。

このプロローグで露払いを終えたものとし、約三百頁に及ぶ中澤氏の哲学研究書に登壇して頂こう。

Ⅱ 本書の基本姿勢

いま挙げた三つの問題に対する中澤氏の基本姿勢をまず確認したい。あえて要約せず、関連する内容を本書から直接引用すると次のようになる。

【アポリアの問題】に関連して

「ソクラテスの対話が最終的に目指す「無知の知」とは、知の思い込みから生じる傲慢を取り除くことを目指すものであり、対話は、無知の自覚を通して、人々の心を真の知の方向に向き返させる試みであったと考えられる」（七頁）

「〔対話篇に、隠された教説を読み取ろうとする〕タイプの解釈が主流であったのは、対話篇がアポリアに終わっているとしたら、対話篇の哲学的意義が消滅すると見なされていたからであろう。そうした考え方の背後には、哲学とは教説の提示にはかならず、教説が提示されていなければ無意味だという根拠のない信念が存している。だが、私には、こうした確信こそソクラテスの活動の意味を理解しないことから生じる誤解であると思われる。ソクラテスにおけるフィロソフィアとは、教説を提示することではない。それは、対話による吟味を通して対話相手の無知の知を目指す特殊な営みなのである。私の見解が正しければ、それは、みずからの生き方を吟味して、その誤りを正すための、人間にとって最も重要な営みなのである」（二三八頁）

【見解の主の問題】に関連して

「対話の中でソクラテスが主張することを、そのままソクラテスの思想と断定することは難しい。ソクラテスは、多くの場合、対話相手の前提を受け入れたうえで議論を展開しているのであり、そこでソクラテスが述べることは、対話相手の思想のあり方と分かちがたく結びついているのである。……我々は常に対話の構造と文脈を考慮しながら、ソクラテスおよび対話相手の個々の発言の意味を考え、評価していかねばならない」(三頁)

【ソクラテスの宗教問題】に関連して

「ソクラテスの活動全体の背後には、神に対する深い信仰が存在している。ソクラテスにとって、正義とは人間の間に存在するようなものではなく、神との関係においてこそ本来的に成立するものであり、人間社会の正義も神的正義に支えられたものであった」(六頁)

「ソクラテスが様々な困難にもかかわらずフィロソフィアを続けているのは、アテナイ市民に無知を自覚させ、それを通して彼らの目を神の方に向かわせるためであった」(四三頁)

「デルフォイ神託は、彼(ソクラテス)の哲学的営み全体を律し、その意味づけを与えるものだといえる。その意味で、ソクラテスの活動は、その全体が、人間的理性を超越した神の意志に基づくものである」(八一頁)

以上の引用が示す内容は、本書を読む我々にとって、中澤氏がプラトン初期対話篇に臨む際の「綱領」に映じるが、実のところ、先入見を排した精緻なソクラテス研究の到達点なのである。

本書は二部構成をとり、序章の説明によれば、第Ⅰ部(第1―6章)はソクラテスの倫理思想の全体像を再構成し、第Ⅱ部(第2―10章)はソクラテスのフィロソフィアが持つ批判的な姿を浮き彫りにする。しかし、内容的には第Ⅰ

部と第Ⅱ部に連関が見られるので、二部構成にとられず、取り扱われる事柄を二つのラインに再編成してみたい。第一のラインは、従来主流のソクラテス像ともいえる主知主義、快樂主義解釈に対する中澤氏の異議申し立てであり、『ゴルギアス』篇や『プロタゴラス』篇の新解釈が軸となる（第2、5、7、8、9、10章）。第二のラインは、『ソクラテスの弁明』や『クリトン』篇を中心に中澤氏がソクラテスの「正義基底原理」を主張するもので、「正義」と並び「神」もソクラテスの行動原理に据えられる（第1、3、4、6章）。この二つのラインを順次、検証しよう。

Ⅲ 主知主義、快樂主義解釈への異議申し立て

従来、ソクラテスを、「徳は知である」のスローガンに示される主知主義者と見る解釈が主流であった。しかも、快と善の同一視に媒介されて快の最大化がすなわち善の最大化とされ、長期的に善を最大化する知を目指す快樂主義者（幸福主義者）の面を持つ主知主義者（功利主義者）とソクラテスはみなさがちだった。このような解釈のもとでの徳とは、快樂計算をうまく行う手段的な知なのである。しかし中澤氏は、このような解釈が成立しないことを『ゴルギアス』篇と『プロタゴラス』篇の精密な読解に基づいて示す。

まず『ゴルギアス』篇に関しては、「節度（ソーフロシユネー）」の概念を洗い直す。「節度」を、非合理的欲望に打ち勝つ徳ととらえる仕方が従来、主知主義・快樂主義解釈を生みだしてきたのであるが、ソクラテスが考える「節度」はそれと違い、「何を為すべきかに対する認知」であり「秩序」原理であるところの「正義」に重ね合わせうるものである（七二頁）。よって、ソクラテスは快の最大化を狙う快樂主義者でない。主知主義者ではあるが、功利的なそれではないのである。

次に、『ゴルギアス』篇解釈に影響を与えてきた『プロタゴラス』篇について、【見解の主の問題】が扱われる。す

なわち、確かにソクラテスは快樂計算的な知を語っているが、それは彼自身の見解ではなく、対話相手であるプロタゴラスの思想から派生したものであることが立証される。プロタゴラスは一種の主知主義者であるが、ソクラテスの主知主義（知の働きを、何を為すべきかの認識と考える立場）とは異なるというのがここでの精緻な論点にほかない。同時に、従来の主流解釈を覆し、プロタゴラスの人間尺度説（相対主義）が快樂計算的な主知主義と親和的であることを示す（一七八―一八三頁）。この鮮やかな分析は、『テアイテトス』篇などの知識論に精通した中澤氏ならではのものである。

同様の鮮やかさは、主知主義解釈のもとになってきた『ラケス』と『カルミデス』の再検討にもいえる。「知識の知識」をめぐる問題に対して知識論的な知見を援用して対処し、整理する手さばきは見事だ。本書が哲学的に奥行きある内容となっているのは、ソクラテス（ないしプラトン）の倫理思想を主題にしながらも、中澤氏の思考が狭義の倫理学にとどまらないフィールドを精力的に動いているからであろう。

Ⅳ 「正義」と「神」の二大原理

ここまで見てきたソクラテス像への異議申し立て、すなわち快樂主義的な主知主義者像への異議申し立てが、従来の主流解釈に対する破壊的な立論だったとすれば、「正義」と「神」の二大原理に基づいて行動するソクラテス像は、中澤氏が積極的に提示するものである。ここでは『ソクラテスの宗教問題』がまさに主題となる。

まず、「不正行為禁止」原則を核とするソクラテスの正義観は、古代ギリシア思想の文脈において「革命的なもの」であるとされる。というのも、「復讐を倫理的行為として容認する伝統的な応報的正義観を、根底から否定するものだからである」（二〇頁）。では、なぜソクラテスはそのような正義観を持つにいたったのか。彼が裁判の陪審員たち

に対して「皆さんよりもむしろ神に従う」と語る言葉に明らかのように、神への絶対的服従がソクラテスの信念の土台にある。例えば、『ソクラテスの弁明』や『クリトン』篇で問題になる国家と国民の関係は「神の法」(四〇頁)、「神的な正義」(四一頁)にかなう限りで成立する。ソクラテスはそんな「神」の原理に忠実に行動したのであり、哲学活動も神命に従うものであった。よって、「国家がソクラテスにフィロソフィアを禁止する命令を下すということは、国家が神に対して不正をはたらくことにほかならなかったのである」(四三頁)。

「無知の知」もまた神に関わっており、ソクラテスにとって「対話を介して無知の知を人々に知らせることは、神の命令であった」(七頁)。人間には幸福に対する「無知の知」(一三六頁)がふさわしく、「人間が神の知恵を手に入れようとすることは、傲慢以外の何ものでもない」(二五〇頁)。哲学活動において神の知と人間の知は峻別されねばならないのである。

このように神への「敬虔」を最重視し、端的に神の命令ゆえフィロソフィアを為すソクラテスが、本書では一貫して提示されている。それはいささか見慣れないソクラテス像にせよ、中澤氏が何らの先入観も持たず、初期対話篇を虚心坦懐に読んだ帰結だと思われる。なるほどテキスト上の根拠は十分にあり、ソクラテスを快楽主義的な主知主義から遠ざける根拠としておそらく最強の解釈であろう。

そのことを重々認めつつ、しかし、拭いたい違和感を覚えるのも事実である。確かにソクラテスは神に従う旨を再三三語っているが、それは本書でも繰り返し指摘されているように、対話篇作家プラトンがソクラテスを擁護(一一一頁)もしくは弁護(一一〇一頁)するため、誇張をまじえて語らせた台詞と考えられないか。無論、プラトンは台詞を無から作ったのではないだろうが、死刑判決を受けたソクラテスの罪状が「国家の認める神々を認めず、他の新奇な神霊を認めた」ことである以上、プラトンとしては「哲学活動を続けたソクラテスこそが真に国家の神々に忠実な人物だった」と反論し、弁護したかったことであろう。いわば、「神の徒ソクラテス」は、いわれなき告訴に対する

被告側の弁証であり、原告側への対人論法的な反論である。そんなプラトンの意図を深読みせず、潔癖にテキストを読めば、神命に従う潔癖なソクラテス像が帰結するのであろう。

もとより、こんな印象批評は、精密なテキスト読解で構築された本書の基盤をいささかも揺るがさないにちがいない。それでも、中澤氏の解釈に対する荻原理氏の疑念（九六、九七頁の注13、15）は読者に一定の共感を誘うのではないか。また、ソクラテス裁判についてディオゲネス・ラエルティオスおよびクセノフォンの記述とプラトン『ソクラテスの弁明』の記述の違いに着目し、そこにプラトンがソクラテスを擁護する意図を浮き彫りにする加藤信朗著『初期プラトン哲学』第一章も説得力に富む。ソクラテスの「神」をめぐる問題は、中澤氏が正当に論ずる「神と理性」の哲学的問題のほかに、「神と裁判」の社会的問題の側面も持ち合わせているように思われるのである。

V エピローグ——二つの論考を加えて

最後に、付帯的な情報提供も書評の役割と考え、本書と内容的に関連する二つの論考を挙げたい。

一つは、中澤氏の著作に約一年先だつて上梓された田中伸司著『対話とアポリアーソクラテスの探求の論理』（知泉書館）である。この著作については、本誌第四十二号（二〇〇六年）において坂井昭宏先生が詳しい書評を書かれている。もう一つは、田中享英先生が書かれた論文「ラケスはなぜ論駁されたか」（『西洋古典学研究』第五十号所収、岩波書店、二〇〇二年）である。タイトルに明らかな通り、田中先生が『ラケス』篇に定位してソクラテスの哲学活動を解明された論文であるが、中澤氏および田中伸司氏の著作にも『ラケス』篇の検討が含まれることから、評者は『ラケス』論の鼎立が壮観に映る。

しかるに、ソクラテスと対話する二人の相手、すなわち、勇氣について非主知主義的な定義（思慮を伴った忍耐強

さ)を示すラケスと、主知主義的な定義(恐ろしいものと恐ろしくないものについての知識)を示すニキアスの位置づけに関し、三氏の見方は同じではない(田中先生はラケスとソクラテスの対話に限って検討しておられる)。そこから評者は刺激を受けた。初期対話篇の典型的な構造を持つとされる『ラケス』篇が、プラトン、ソクラテスに挑む「勇気」を与えてくれそうである。

(ミネルヴァ書房、二〇〇七年、三〇八頁)